

## [教育実践報告]

## 「女性学ゼミ」の実験(7)

小 森 治 夫

## 目 次

はじめに

- I. 「女性学ゼミ」においてとりあげた文献
- II. 「女性学ゼミ」においてとりあげたビデオ
- III. 学生による「女性学ゼミ」の評価(1)
- IV. 学生による「女性学ゼミ」の評価(2)

おわりに

## はじめに

「女性学」と「男性学」をテーマにとりあげた私のゼミナール活動について、『女性学ゼミ』の実験」と題する拙論を『商経論叢』第48号において発表したのを皮切りに、『商経論叢』第49号においては「『基礎演習』における『女性学ゼミ』の実験」と「『女性学ゼミ』の実験(3)」を発表し、『商経論叢』第50号においては「『基礎演習』における『女性学ゼミ』の実験(4)」を発表した。また、『鹿児島県立短期大学紀要』第51号(人文・社会科学篇)では、「『女性学ゼミ』の実験(5)」と「『基礎演習』における『女性学ゼミ』の実験(6)」を発表した。

そこで、『商経論叢』第51号では、私が鹿児島県立短期大学に赴任して5年目と6年目に担当した「女性学ゼミ」の実験について報告することとしたい。

---

キーワード：女性学，男性学，ビデオ学習

私から見れば第5期生となるが、今までとの違いは、「演習1」（1年生後期）は従来どおり2冊の文献を読んだが、「演習2」（2年生前期）では基礎演習で試みた「ビデオで女性学」をとりいれたことである。

### I. 「女性学ゼミ」においてとりあげた文献

まず、私が「女性学ゼミ」でとりあげた2冊の文献について、紹介しておきたい。

最初に、日本における「女性学」のパイオニアの一人である、井上輝子氏の『女性学への招待』（有斐閣）をとりあげた。

この本では、女性のライフステージにあわせて議論が展開されており、「女性学」への入門書として、わかりやすい構成になっている。ただ、私からみれば、著者の主張には、「男性敵論」的なニュアンスがあるように思われる。

ここでは、目次を紹介することにより、内容の紹介に代えたい。

#### プロローグ 女性学の誕生

- 1 つくられる女の子……幼児期における性役割の形成
- 2 女子と男子の学校生活……教室の中での性役割の形成
- 3 恋愛と結婚……“結婚幻想”はこうしてつくられる
- 4 母になるということ……根強い母性信仰
- 5 働く女たち……職場における性差別
- 6 主婦の一日……なぜ病むのか
- 7 変わる女の一生……人生80年時代

#### エピローグ 女性学のセカンドステージ

「女性学」と「男性学」をセットでとりあげるのが、私の「女性学ゼミ」の特徴である。そこで、「女性学」の入門書に続いて、「男性学」の入門書として、日本における「男性学」のパイオニアの一人である伊藤公雄氏の『男性学入門』（作品社）をとりあげた。

著者の男たちへのメッセージは「<男らしさ>の鎧を潔く脱ぎ捨てよ！」であり、社会の進むべき方向の提言は「男も女も、家庭も仕事も！」である。また、著者が考案した「男の生活自立度チェック」は、「妻のパンツを外で干せますか？」という質問であり、ユニークな著者の提案は学生たちにも好評であった。私は「男はつらいよ」をもっと女性に理解してほしい。

第 1 章 悩める“男の一生”……現代男性論

第 2 章 <男らしさ>って何だろう？……「男のメンツ」の中身

第 3 章 男の目で見直す男性社会……<男性学>の現在

第 4 章 文化と歴史の中の男と女……ジェンダー論入門

第 5 章 男性のための（そして女性のための）女性学入門

第 6 章 「働く主夫」の生活と意見……体験的主婦論

第 7 章 ニッポンのお父さんたちへ……現代父親論

第 8 章 もっと群れよう、男たち！……“メンズ・ムーブメント”のすすめ  
おわりに ぼくが<男性学>をはじめた理由

以上が、「演習 1」（1 年生後期）でとりあげた、「女性学」と「男性学」の 2 冊の入門書である。

## II. 「女性学ゼミ」においてとりあげたビデオ

「演習 2」（2 年生前期）では、私が本学に赴任してから収集した「女性学」に関するビデオを活用して、視覚的でイメージがつかみやすい「ビデオで女性学」を、2 年生を対象に実験してみた。

まず、日程を紹介すると、次のとおりである。13 回の「演習 2」で、15 本のビデオを観賞して、ゼミ討論を行った。なお、1 年生後期の「演習 1」でも、ビデオを活用したゼミを 2 回もっているの、それも併せて紹介する。

1 年生・後期

10月6日(水) 「課外授業ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」

11月18日(木) 「オモシロ学問人生 男らしさにさようなら」

「男と女の境界線……その性をとりもどす時」

2年生・前期

4月19日(水) 「心の傷に寄り添う」

4月26日(水) 「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より

③ 10代の性体験36%

5月10日(水) 「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より

① 中絶経験43%

5月17日(水) 「なぜ虐待が止められなかったのか」

「なぜ男の子を救えなかったのか」

5月24日(水) 「子を虐待する母親たち

……代理によるミュンヒハウゼン症候群」

5月31日(水) 「こころの風景 子育て ① わかって下さい・母親たちの孤独」

6月7日(水) 「こころの風景 子育て

② これが私の生きる道・母親たちの選択」

6月14日(水) 「“くたばれ”に大反響・専業主婦論争第2弾」

(参考文献 石原里紗『ふざけるな専業主婦』)

6月21日(水) 「夫が突然殴り出す」

「妻を殴る夫」

6月28日(水) 「ストーカー規制法・恋愛感情どう判断？」

7月5日(水) 「世紀を越えて・ウーマン・豊かな国の静かな革命」

7月12日(木) 「世紀を越えて・男と女・多様化する結婚のかたち」

7月19日(水) 「“世紀を越えて”を読む・男女の役割を越えて・

女性の社会進出が問いかけるもの」

次に、「演習1」と「演習2」において観賞したビデオの内容について、簡単に紹介しておきたい。

まず、「田嶋陽子が語る男と女」は、NHKで放映されている「課外授業ようこそ先輩」シリーズの1本である。この番組は、有名人が自分の母校を訪ねて1日教師をするというものであるが、このビデオはフェミニストとしてTV番組等で有名になった、法政大学の田嶋陽子教授が出演したものである。田嶋氏はあるクイズを出題することによって、小学生でさえも、いわゆる「男らしさ」「女らしさ」の常識にとらわれていることを痛感させる。また、田嶋氏の生い立ち、とくに母との葛藤についても個人史が語られ、なぜ彼女が激的なフェミニストとなったのかの謎も明かされる。

「男らしさにさようなら」は、NHKで放映されている「オモシロ学問人生」シリーズの1本である。この番組は、ユニークな研究者とその研究内容を紹介する番組であるが、このビデオは男性学のパイオニアとして著書『男性学入門』で一躍有名になった、大阪大学の伊藤公雄教授が出演したものである。1990年代は「男性問題」の時代と喝破した伊藤氏が、男性の「自立度」をチェックする方法（「妻のパンツを外で干せますか？」）を伝授しつつ、「男らしさ」の鎧を脱ぐことをすすめるというものである。

「男と女の境界線……その性をとりもどす時」は、最近、話題となっている性同一性障害に悩む男女の物語である。生まれもった男体や女体に違和感もちつづけ、「私の肉体はまちがっている」と、心と身体とが引き裂かれた症状をもつ人たちに、日本でもようやく医療としての性転換手術が認められた。性同一性障害に悩む3人の男女を登場させ、性とは何か、「男らしさ」「女らしさ」とは何かを深く考えさせる好番組である。

「心の傷に寄り添う」は、NHKの「クローズアップ現代」で放映された。この番組では、上・下巻を合わせて130万部を超える大ベストセラーになった、『永遠の仔』の作者である天童荒太氏にインタビューを試みている。幼いころに親から虐待された男女3人が、17年の歳月を経て再会し、新たな悲劇へと導かれていく……。これが、児童虐待を扱った『永遠の仔』のストーリーであるが、2000年4月から『永遠の仔』のテレビ放送が始まったので、タイムリーかと思いついてあげてみた。物語のラストにある「生きていてもいいんだよ」と

いう作者の肯定のメッセージが心に残る。

「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より」は、NHKの4回連続の特集番組である。NHK『性についての実態調査』は、1999年11月～12月に実施された、日本で初めての性に関する実態調査であり、全国の16歳～69歳の男女3600人を対象にしている。82項目にわたる調査結果は、男女の性意識の違いを明らかにするとともに、今の日本社会の男女のあり方に疑問を投げつける数字を現している。4回ともこの調査結果に基づく、ショッキングなタイトルがつけられており、第1回は「中絶経験43%」、第2回は「性的被害33%」、第3回は「10代の性体験36%」、第4回は「セックスレス19%」である。このうち、基礎演習では、「10代の性体験36%」と「中絶経験43%」をとりあげた。第3回の「10代の性体験36%」では、家庭や学校では十分な性教育が行われていない実態が明らかにされるとともに、小学生の低学年から性教育が行われている実例が紹介されており、注目される。また、スウェーデンにおいて女性の社会進出が進んだ背景には、きちんとした性教育が行われていることが指摘されており、興味深い。第1回の「中絶経験43%」で驚くのは、30～40歳代の妊娠中絶が10歳代より多いことと、避妊が男性まかせになっている日本の特異な実態である。

「なぜ虐待が止められなかったのか」は、NHKの「クローズアップ現代」で放映された。番組では、千葉県船橋市の児童養護施設「恩寵園」でおきた、前園長による園児への暴力をとりあげている。そして、なぜ千葉県はこの児童虐待事件を放置し続けたのか、その真相に迫ろうとしている。それは、一言でいえば、次にとりあげる「なぜ男の子が救えなかったのか」における児童相談所の無責任な対応とも相通じる、行政の無責任性とでも言うべきものであろう。

「なぜ男の子が救えなかったのか」は、NHKの「クローズアップ現代」で放映された。義父から3年間暴力を受け続けて、ついに死亡した5歳の子どもの事件である。義父の暴力が許せないのはもちろんだが、母親がわが子への夫の暴力をとめず、第三者には暴力ではないと夫をかばったという事実がやるせない。また、虐待の事実を知りながら、3つの児童相談所の対応はあまりにも

遅く、男の子を義父の暴力から救えなかったという、日本の現実が本当に情けない。

「子を虐待する母親たち……代理によるミュンヒハウゼン症候群」は、NHKの海外ドキュメンタリー番組である。代理によるミュンヒハウゼン症候群とは、医師に接触するためにわが子を傷つける精神の病である。この症状をきたす母親は、悪意をもって計画的に子供に危害を加える。行為の目的は、医者や医療関係者との接触である。人々の注意を引きつけることで、母親は自分の存在価値を確認しようとする。病気の子供がいれば世間は自分に注目する、とでも考えるのだろうか、信じがたいことではあるが……。

「こころの風景 子育て」は、NHKの2回連続の特集番組である。この番組では、15人の現代の母親たちの生の声を集めて紹介している。

第1回の「わかって下さい・母親たちの孤独」では、子育てに悩む現代の母親の姿を紹介している。公園に行っても友だちができないので無理して行かないという母親、夫が育児に非協力的で密室のマンションの育児に疲れ二人目は産まないと決心している母親、母子手帳にある月齢に応じて「××ができるはい・いいえ」と記入させるページに自分の子供があてはまらないと不安になるという「母子手帳のゆううつ」などである。

第2回の「これが私の生きる道・母親たちの選択」では、母親が自分を大切に、自分の人生を生きる姿を紹介する。子供が産まれても働き続けることを選択した母親、離婚して子供の親権を父親に譲ったフリーライターの母親、「4人の子をもちたい」と頑張って働く母親などが紹介される。現在、念願の4人目を妊娠中で、粘り強い話し合いの末、夫が育児休業制度を利用する予定である。私はこれらのケースから、専業主婦ではなく働き続けること、すなわち、女性の経済的自立の重要性を理解してほしい。

「“くたばれ”に大反響・専業主婦論争第2弾」は、民放の朝の「モーニング」の特集である。石原里紗氏の話題の本『ふざけるな専業主婦』を読んで怒る専業主婦をスタジオに招いて、石原里紗氏と対決させようという企画の、壮絶バトル・トーク番組の第2弾である。石原氏の主張は、■専業主婦の家事は仕事

ではなく趣味，②夫に寄生する立場，おとなしくしろ，③他人に税金，年金を負担させる社会の粗大ごみ，という過激な内容である。ゼミでは、『ふざけるな専業主婦』を事前に読んでくることを条件に，ビデオを観賞したが，番組での討論そのものは全然かみあっていなかったという感想をもった。

「夫が突然殴り出す」は，NHKの「クローズアップ現代」で放映された。今や社会的な大問題となっている，家庭内での夫婦間暴力（ドメスティック・バイオレンス）を扱っている。番組では，今まで密室内の出来事として隠されていた，夫の妻への暴力の実態を，3人の女性に取材することによって明らかにしている。逃げたいが逃げられないという女性の心理，家庭内の夫婦げんかの延長ととりあってくれなかった警察，経済的に自立していない専業主婦の問題などが提起され，DV防止法の制定やシェルターの整備などが今後の課題として提起されている。

「妻を殴る夫」は，民放の「ニュース・ステーション」の中の特集である。妻に暴力をふるう夫の実態と，妻の恐怖が描かれている。また，アメリカでは，妻に暴力をふるえば警察に現行犯逮捕され，その後もカウンセリングを義務づけられるという，日本とは全く違う警察のドメスティック・バイオレンスへの対応が紹介されている。さらに，この番組では，30年間，夫に暴力をふるわれ続けたという女性が登場し，その精神療法としての絵画療法が紹介されていたのだが，夫の顔が赤鬼のように描かれていたのが印象的であった。

「ストーカー規制法・恋愛感情どう判断？」は，NHKの「クローズアップ現代」で放映された。2000年5月に法案が成立し11月から施行される，ストーカー規制法の内容と問題点について，解説を加えた番組である。7割が男女の恋愛感情のもつれからと言われるストーカー行為だが，ストーカー規制に警察はどのようにとりくむべきなのかについて，日本で最初のストーカー規制条例にもとづいて犯人を逮捕した鹿児島での事例を含めて，さまざまな問題点が紹介されている。

「ウーマン・豊かな国の静かな革命」と「男と女・多様化する結婚のかたち」は，NHKの大型特集「世紀を越えて」シリーズで放映された番組である。



「ウーマン・豊かな国の静かな革命」では、1970年代にAT&Tを相手に訴訟を起こして女性が男性と同等に働く権利を認めさせたアメリカ人女性、最高裁判事候補のセクハラ告発を契機に実現した1990年代の連邦上院議員選挙における女性の大量進出など、アメリカにおける女性の社会進出をわかりやすく描いている。また、アメリカでは新生児の3分の1を未婚の母が産むなど、シングル・マザーが増えている背景として、女性が自らの意思で妊娠や出産をコントロールすることを可能にしたテクノロジー（例えばピル）を指摘している。

「男と女・多様化する結婚のかたち」は、フランスのPACS（連帯市民契約）とアメリカのステップ・ファミリーを中心に、多様化する結婚の新しいかたちを紹介している。フランスでは、法的な結婚をしないで同棲を続けるカップルが増加しているが、このような人たちの権利を認めよう、さらには同性間の契約も認めようというのが、PACSである。また、アメリカでは離婚が急増し、2組に1組が離婚をしているが、同時に子連れで再婚する男女が増大している。これにより誕生する新しい家族が、ステップ・ファミリーである。

「男女の役割を越えて・女性の社会進出が問いかけるもの」は、NHKの特集番組である「“世紀を越えて”を読む」シリーズで放映された番組である。この「“世紀を越えて”を読む」は、「世紀を越えて」で放送された内容を紹介し、そこで提起されたテーマを、スタジオで専門家や有識者との対話を重ねながらより深く掘り下げ、今後の日本のあり方を探ろうという番組である。今回のゲストは、実業家の奥谷禮子氏とジェンダー論研究者の瀬地山角氏とで、議論の中では、男らしさ・女らしさにこだわった、男女の固定的な役割分業ではなく、個人が性別から自由になれる社会、つまりジェンダー・フリーな生き方ができる社会の重要性が強調されている。

### Ⅲ. 学生による「女性学ゼミ」の評価(1)

学生が「女性学ゼミ」をどのように評価しているのか、2000年7月にゼミ生7名を対象に、簡単なアンケート調査を実施した。回収できたのは7名分で、

回収率は100%である。

アンケート項目は四つである。

一つは、「あなたは『女性学』を学んでよかったですか？」という問いに対して、「よかった、よくなかった、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点がよかった（よくなかった）ですか？」と問うものである。

二つ目は、「社会に出てから『女性学』を学んでいたことが役に立つと思いますか？」という問いに対して、「役に立つと思う、役に立たないと思う、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点が役に立つと思いますか？」と問うものである。

三つ目は、「ゼミでは2冊のテキストをとりあげましたが、それぞれの感想を教えてください」というもので、とりあげた2冊のテキストそれぞれについて、感想を書くための自由回答欄を設けた。

サンプル数が少ないため、必ずしも正確な評価とは言えないが、「『女性学』を学んでよかったですか？」の問いに対しては、7名が「よかった」と回答している。具体的なよかった点について紹介すると、次のようなものである。

- ・「ゼミで『女性学』『男性学』を学ぶ以前は、興味があるというぐらいだったのですが、ゼミで2冊のテキストを読み、多くのビデオを見る中で、女性の生き方や働くこと、結婚、育児、社会の中での女性の立場などについて考えることができよかったですと思います。また、討論（感想）の中で、みんなの『女性』としての考えや意見を直に聞くことができ、それを聞くことで違った見方をする事ができるようになりました。口に出して『女性』『人間』としての自分の考えをはっきりと言うことで、また新しい自分を発見できたように思います。」
- ・「今まで自分の中で考えていた、女性・男性の性による役割の区別という点の考え方を考えることができた。今までは、社会の中心にいるのは男性で、それを支える（サポートする）立場にいるのが女性だと思っていた。しかし、『女

性学』『男性学』を学ぶ中で、女性だから、男性だからという考え方をもって生活するのではなく、能力に応じた人の見方をするようになってきたと思う。はじめは『独身で仕事を続けることが悪い（淋しい）ことではないか?』と思っていた部分も多少はあったが、自分が好きなことを好きなだけやっていくことのできる人生こそが、本人にとっての幸せになると思えるようになった。」

- ・「私は、『女性学』『男性学』を学ぶ前までは、女性の方が男性よりかなり不利な生き方をしている人が多いと思っていたし、自分もどうして『女だから』と言われたいいけないのかと思っていた。しかし、男性のつらい面も知ったし、女性も力強く生きていく人がたくさんいるということなどいろいろ知って、もっと男性と女性、その間の人達はお互いを思いあっていくべきだということが学べた。」
- ・「『女性学』を軸に性の問題や虐待、子育て、ストーカー、専業主婦など、世間で問題になっていることについて、学び考える機会をもつことができた。他のゼミ生の意見からも考えさせられることがたびたびあった。まだ学生であるため、実際には体験したことがないのでピンとこないこともあったが、実際のそういうケースにあったときに、ある程度の対応ができる免疫のようなものが身についたように思う。」
- ・「今までは『女だから、男だから』という考えに、歯がゆさ・いらだちを感じはしていても、それが当たり前までとはいかなくても普通の中で生活してきた。しかし、その考えは間違っている、女も強くなっていい、ということを知った。そして、専業主婦のあり方、多様化する性、多様化する結婚のかたちなどを学び、これからの恋愛・結婚についても、今までの考えと今回学んだことを通して、より自分らしさ、幸せをつかむことができるような気がする。また、彼氏とこれらの話をすることで、考え方の違い、昔の考えにとらわれていることなどを知ることができたことは良かった。」
- ・「知らないことを結構いろいろたくさん知ることができた。  
生活している上で、『女性学』『男性学』に関することに目がよくいくように

なった。

専業主婦や仕事をしている女性、おかまやゲイ、離婚する人々、結婚する人々、人工受精をする人々 etc……多くの人々の気持ちを知ることができた。

児童虐待などの現状を改めて詳しく知ることができた。」

- ・「今まで考えたこともなかったことを、考える機会が得られた。

男らしさ、女らしさは私は必要だと今でも思っている。しかし、それを相手に押しつけてはいけないということを考えました。男らしさ、女らしさがなくなってしまったならば、何とつまらないと思ったりもします。では、何が男らしくて、何が女らしいのかと言われると、これも一概には言えないような気がします。自分らしくというのが、一番良いのだと思う。

息子に『男でしょ』とか『男のくせに』とか言うのはやめようと思った。」

二つ目の「社会に出てから『女性学』を学んでいたことが役に立つと思いますか？」の問いに対しては、7名が「役に立つと思う」と回答している。まず、具体的な役に立つ点について紹介すると、次のようなものである。

- ・「私はバイトの経験もないし、今まで家と学校の中だけで生活してきました。社会と接する機会が少なかったので、これから社会に出たときに厳しさを知ると思います。その時、やはり女性であるから、『社会が女性に対する姿勢』という問題にきつと直面すると思うのです。しかし、このゼミの中で学んだことを、この厳しい現実社会の中で思い出し、活かしていきたいです。社会の中で、自分と『その現状』に妥協することなく、はっきりとした意見を持って生きていけると思いました。『男性と結婚すれば働かなくていい、頼っていこう！』なんて考えはナンセンスです。社会の中で自分の位置を築き、結婚するにせよ、自分の分は自分で稼ぐ、そんな自立した女性になりたいと思いました。」
- ・「『女性学』が社会に浸透しきつたとは言えないが、今回学んだことで私は『女性学』がどういうものかを知ることができた。1人1人は小さな力でも、男

女にとらわれない考え方ができたら、徐々に社会は変わるだろう。女として生きることの視点や物の見方が社会にもたらす影響は、これからはより大きくなると思う。女として生きること、経験、とりまく状況を分析し、道を開いていく『女性学』は、働くこと、恋愛、結婚、介護など、毎日の生活の中に顔を出し、役に立つと思う。」

- ・「もちろん、このことで人と衝突することもあるだろうと思うが、自分に自信をもって仕事をするができるようになると思う。『女だから男の人を立てなくてはい！』とは思わず、仕事のできる人を見習い、目標にするという考え方をするようになった分、何事にも積極的に挑戦していけると思う。

これからの女性は、家に1日中いて夫と子供の帰りを待つという、昔ながらの存在としてではなく、男性の下で雑用を任される使いぱしりの存在としてでもない、自分の人生を自分で切り開いていくという存在にますますなっていくと思う。そのような社会に何の違和感もなく入っていけるという点でも、近い将来、役立つと思う。」

- ・「社会の中での過去・現在の女性の立場や働きを学べたので、自分が実際に社会に出たときに、先輩の気持ちや自分が体験することに、少しでも理解ができると思います。また、結婚してから、夫や子供との関係も深く考えていくと思います。」
- ・「就職すれば、女性差別やセクハラなどを受けて、仕事を辞めたいと思うことがあるかもしれませんが。でもゼミで、『泣き寝入りをしたら負けだ』ということを学んだので、相談をすとか、相手に文句を言うとか、解決するよう努力していきたい。また、もし将来結婚するとしたら、共働きで子育てを協力してくれ、暴力をふるうことはないと確信できる相手を捜そうと思う。」
- ・「女性だから、結婚したら仕事を辞めなければいけない、という考えをちゃんと否定できる。仕事をしながら、家事も頑張りたい。

お母さんになった時、女らしさ、男らしさにあまりこだわらずに育てられると思う。

女性としての自信がもてるようになった。

児童虐待とか、絶対しない！

結婚は慎重に考える。世間に惑わされない。」

- ・「自分が家庭の中で、社会の中で、どのような立場であり、どのようなことが非合理的なことなのか、考えるようになった。」

三つ目の「2冊のテキストの感想」については、次のとおりである。

### ①『女性学への招待』

- ・「初めて読んだ『女性学』の本ですが、章だてが女性のライフサイクルに沿って展開されていて、わかりやすかったです。最初に入る入門書としては、良いテキストではないかなと思います。しかし、著者の考えに賛同できないところも多々ありました。私が一番印象に残っているところは、レジュメを担当したところでしたが、『主婦の一日』という章でした。母と『主婦業』についての考えを語り合うこともできましたし、多くの女性が抱く『家事の中で、自分が社会に取り残されている孤独』というものを知りました。私がこれから家事・育児などを経験する時、これらのテキストや討論の中で学んだことを活かせるのでは……と思います。『女性学』の入口として、女性が直面している問題などを、この本を読む中で考察し、自分の考えがもてるようになって良かったと思います。」
- ・「『女性学』を初めて勉強する際にこのテキストを使い、今まで知らなかったことや、女性の一生の生き方などが書いてあり、おもしろいと思ったが、このテキストは必要以上に男性、男性社会を罵倒していると思った。女性をとりまく状況は変化してきているけど、法や制度はまだまだ不十分で、性の商品化はますますエスカレートしてきているので、これくらい厳しい意見でも良いのかもとも思ったりして、自分の中で矛盾が生じたテキストだった。」
- ・「女性が書いたためか、女性の立場というものが大げさに書かれていたような気がした上に、初めて手にした『女性学』の本だったので、読んでいくうち

に共感する面と反発する面が出てきた。共感した点は、第2章の幼い頃から共感する面と反発する面が出てきた。共感した点は、第2章の幼い頃からの教育によって、男性優位が確立していくという点である。男に女はかなわないということを刷り込まれることで、大人になってもやはりその意識から解放されない女性が数多くいると思う。第3章のセクシュアル・ポリティックスの項で、売春は女性に対する男性の暴力が目に見える形で現れた例であるとして、全面的に男性が悪いように書かれているが、売春をすることを思い立って実行に移すのは女性であるから、レイプなどのようなものと同じように考えるのはおかしいと思った。」

- ・「このテキストでは『女性学』の成り立ちなど、外国の事情も詳しく学べた。男性の批判がかなりしてあり、『言い過ぎでは?!』と思うこともたまにあった。初めて聞く言葉や外国のことが書いてあることが多く、レジュメづくりで、要点をまとめるのが難しかった。」
- ・「第5章の『働く女たち』はとても印象に残っている。女性の社会進出が増加しているとはいえ、職種は偏っているし、管理職にはなかなか入れないだとか、セクハラ、男女間賃金格差もある。実際、就職活動をしてみて、若いうちしか働けない企業などもあり、働くことにとても不安がある。だけど、私たちの時代からそういう環境を直していき、女性が働きやすい社会にしていかなければ……と思う。」
- ・「女性らしさ、男性らしさについては、あまりよく考えたことがなかったけれど、このテキストを読んで、そう言えば……と思うことがたくさんありました。そして、このようなことにあまりにもとらわれすぎている自分に気づき、そんなにこだわる必要はない、と思いました。今、就職活動をして実感したことは、女性だからといってしてはいけない仕事はないと思います。やりたいと思ったら、やったらいいと思います。」

「女性の人生が多様になり、人生の残り半分を自由に使うことができるようになった。今まで当たり前と思ってきたことが、本当にそうなのか、考えるようになった。」

## ②『男性学入門』

- ・「大変おもしろいテキストでした。『女性学への招待』を学んだ頃は、少し女性に偏った意見をもっていたのですが、この『男性学入門』によって『あー、男の人もつらいんだな』と広い目をもてるようになったと思います。父の気持ちもわかってあげられるようになりました。リストラ、過労死、『男らしさのよろい』に縛られて、家庭に居場所がない『お父さん』。この本の中で、女性は表現力が豊かなのに比べて、男性はそれが乏しいこと、その能力の欠如により『夫婦ゲンカ』をした時、つい手が出てしまうことなどを知りました。『女性の生き方』を変えていくには、『男性の生き方』も変えないと、女性問題は解決しないのだと思いました。今の日本社会は労働時間をもっと減らし、自由時間を拡大しないといけないと思います。その中で、男性も女性も、家事を助け合って、お互い対等なパートナーとして自立して生きていくことが、これからあるべき人間の関係なのではないかな、と思いました。」
- ・「このテキストはとても分かりやすく、おもしろかった。男性も男らしさに縛られていたり、仕事や父親などのいろいろな問題に悩まされていることを知った。男女とも仕事と家庭、両方ともしていくことがいいのではと思った。そのためには、やはり法や制度の整備が重要である。『女性学』だけではなく、『男性学』も学んだことで、男性の立場に立った考え方もできるようになった。」
- ・「90年代は『男性問題』の時代と言われている。その中の一つで、『弱くなった男』という問題が指摘されていたが、男性が弱くなったのではなく、もともとあった自分の姿に素直になっただけだと思う。人間なのだから、悲しい時、つらい時、嬉しい時、楽しい時があると思う。これまでの男性は前者を表現することを嫌っていた（表現するのが下手なのかもしれない）ようだが、これからの男性は美を追求し、感情に素直になることのできる人たちだと思う。それは弱くなったのではなく、本来の人としての姿に近づいてきただけのことではないだろうか、と考えるようになった。『男性も家事をするのが当たり前の中にならば良いのに……』と、強く思うきっかけになった1



冊でした。」

- ・「『女性学』の本よりこちらのテキストのほうが読みやすく、おもしろくも書いてあった。このテキストを読んで、男の人をつらいところがあるんだとよくわかった。また、マイク・マグレディさんの話もおもしろかった。」
- ・「男性側の意見を知ることができてとてもおもしろかった。『女性学』ばかりがクローズアップされがちだが、『男性学』も存在し、男性も男らしさに縛られているのだ。男性であるがゆえに、人前で泣くことや、妻のパンツを干すことなどが、恥ずかしいことと思われがちである。私たち女性の側も、もっと男性の見方を変えていく必要があると思う。」
- ・「『男らしさ』という考えが世間では強すぎて、男の人はけっこう苦労していることがよくわかって、なんかかわいそうに思えた。

けれど、『男は外、女は内』という考えを今だにもってる人は、嫌いだ。リストラされる男の人の苦しみが痛々しいと思った。

『公園デビュー』というのが一番印象深かった。」

「<男らしさ>ではなく、<自分らしさ>を追及する。

『男であること』へのこだわりを捨てる。

『男性学』を学ぶことによって、『女性学』がわかる。」

#### IV. 学生による「女性学ゼミ」の評価(2)

アンケートの四つ目の質問である「印象に残っているビデオ」については、次のとおりである。

- |          |  |
|----------|--|
| 第1位 (5名) | 「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より<br>① 中絶経験43%」 |
| 第1位 (5名) | 「世紀を越えて・男と女・多様化する結婚のかたち」                 |
| 第3位 (4名) | 「なぜ虐待が止められなかったのか」<br>「なぜ男の子が救えなかったのか」    |
| 第3位 (4名) | 「ストーカー規制法・恋愛感情をどう判断？」                    |
| 第5位 (3名) | 「男と女の境界線……その性を取りもどす時」                    |

- 第5位 (3名) 「“くたばれ”に大反響・専業主婦論争第2弾」
- 第5位 (3名) 「世紀を越えて・ウーマン・豊かな国の静かな革命」
- 第5位 (3名) 「こころの風景 子育て  
② これが私の生きる道・母親たちの選択」
- 第9位 (2名) 「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より  
③ 10代の性体験43%」
- 第9位 (2名) 「子を虐待する母親たち  
……代理によるミュンヒハウゼン症候群」
- 第9位 (2名) 「“世紀を越えて”を読む・男女の役割を越えて・  
女性の社会進出が問いかけるもの」
- 第11位 (1名) 「課外授業ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」
- 第11位 (1名) 「こころの風景 子育て  
① わかって下さい・母親たちの孤独」
- 第11位 (1名) 「夫が突然殴り出す」  
「妻を殴る夫」

以下、順に、ビデオの感想を紹介しよう。

- 第1位 (5名) 「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より  
① 中絶経験43%」

・「中絶体験の年齢別グラフが画面に出た時、40代～50代の割合が高かったのに驚きました。中絶というと、性的に未熟な10代の問題だとばかり思っていたからです。また、先進国の中で、日本は異常に避妊の選択肢が狭いということにも驚かされました(コンドームだけ)。ピル解禁となった今、女性が産む、産まないを決めることができるようになったことは、これからの日本社会にも大きな影響を及ぼすことだと思います。もう少し日本も避妊に対して理解を深めるべきだと思いました。」

- ・「『若い人に多いのかな?』と最初は思っていたが、中年女性に多いというアンケート結果を見て驚いた。高齢出産になるため、経済的に苦しいためなど、様々な理由をつくって自分を正当化しようとしていたことに腹が立った。妊娠を望まないのならば、コンドーム、ピルなどの使用で、妊娠を防ぐための対策を自分たちで取るべきではないだろうか。」
- ・「10代の人たちの望まない妊娠、中絶という情報をテレビでよく見ていたので、このタイトルを見た時には10代の人たちのことかと思ったら、30代後半からの中絶も増えているというので驚きました。10代の中絶ばかりとりあげて意見している年上の人たちも、考えなければいけないゾと思いました。」
- ・「未婚のカップルだけではなく、既婚者も何らかの理由で中絶をしている。手術時、子宮の中で赤ちゃんがメスを逃れて動きまわる映像を見たことがあるが、とてもかわいそうである。子供には殺される理由なんかないけれど、生まれてからつらい人生を歩むのもかわいそうなことである。だからといって中絶には賛成できない。すごい葛藤があると思う。また、男性のコンドームに頼るのではなく、女性もピルを使うなど、SEXは2人の問題なのだから、きちんとすべきである。値段が高いと思っても、中絶費や精神的、肉体的な傷のことを考えると、決して高い買い物ではないと思う。」
- ・「43%という数字に驚かされた。このビデオを見る少し前に、地元の同い年の子が中絶を4回して、もう赤ちゃんができなくなった、という話を聞いたばかりだったため、深く考えさせられた。ピルが処方されるようになったが、費用がかかるので、もっと若い女性も利用しやすいようにしてほしい。」

#### 第1位 (5名) 「世紀を越えて・男と女・多様化する結婚のかたち」

- ・「フランスの新しく制定された法律PACSは、あらゆる人間に選択の自由を与えるという点で、良いものだと思います。これからの時代は、男と女は結婚しなければ社会的に認められないという考えには、縛られなくなっていくと思います。結婚にもいろいろなかたちがあってよいと思います。男と女

でなくても、好きになって生涯暮らすというのは、その人にとって幸福で最も良い選択なのです。」

- ・「私は結婚前に絶対、同棲をしたほうが良いと考える。フランスは結婚しないで同棲を何年もするカップルが多いため、PACSが整備される。日本とは違い、うらやましい。また、アメリカではステップ・ファミリーという新しい家族のかたちがある。これは、子供の気持ちを大切に、そして精神的ケアもきちんとなされなければ成り立たないと思う。」
- ・「アメリカのスピード結婚やフランスのPACSなどを初めて知った。私自身は結婚をそういう簡単なものとは考えられないので、これらを利用する人たちに共感できない。だが、同性愛者の人たちなどにとっては、PACSは必要で、幸せになれるいいシステムなのかもしれない。」
- ・「離婚が増加するにしたがって、ステップ・ファミリーが増え、新しいかたちの家庭が多くなるような気がした。ビデオを見ていて、それ以上傷つかないために離婚して、新しい生活を始めるように受けとめたが、そうすると一番傷ついているのは子供かもしれないと思った。夏休みを父親の元で過ごし帰っていく男の子の涙が気になった。」
- ・「結婚に対する考えが簡単なものになってきていることが悲しい。確かに結婚してからイヤだと思ったり、他に大切な人に出会うのはしかたないが、夫婦も家族も何もかも『使い捨ての時代』という考えは私は絶対にイヤです。結婚はやっぱり大切なことだし、真剣に考えるべきことだと思います。」

第3位（4名） 「なぜ虐待が止められなかったのか」

「なぜ男の子が救えなかったのか」

- ・「本来なら子供を守るべき場所である児童相談所の所長が、『緊急性を感じとれなかった』と発言したことに、怒りを乗り越してあきれてしまった。それは相談所の立場から見たものであって、当事者にすれば緊急を要するから相談しているのである。相談所の体制や社会意識を早く改善するべきだと思っ

た。私は自分の子を虐待する親には決してなりたくない。」

- ・「男の子の最後の言葉『おなかが空いた』は、あまりにも印象的で悲しくなりました。虐待をしているという事実があって、児童相談所はその事実を知っていたにもかかわらず、3つの児童相談所が男の子を父親の虐待から守れなかったのは、相談所のズサンさもありますが、親権という法の壁に阻まれていたのも要因でした。児童虐待防止法が成立した今、子供たちに救いの手が差し出さなければなりません。」
- ・「虐待のニュースが頻繁に取り上げられていて、弱い子供たちはかわいそうだと思います。このビデオでも、虐待の事実を3カ所の児童相談所が確認していたにもかかわらず、虐待を受けていた子は死んでしまうという、悲しい結末になってしまいました。児童相談所の全国ネットワーク化が必要だと思いました。」
- ・「このビデオは、男の子が父親から虐待を受け、最後には殺されてしまったという事件で、ニュースでも取り上げられていた。周囲の人たちは虐待に気づいて対処しようとしていたのに、法の壁などがあったりして救えなかったことが残念だった。虐待の件数が増える現代、十分な対応が望まれる。」

### 第3位（4名） 「ストーカー規制法・恋愛感情をどう判断？」

- ・「ストーカーの大半は以前からの顔見知りであり、男女関係のもつれから事件になるケースが多い。男女関係、恋愛感情の中に、警察はどう介入すればいいのか、難しい問題だと思いました。しかし、埼玉県桶川市や静岡県沼津市の事件など、とくに桶川のケースはもっと早く警察が動いていたら解決することができたはずです。ストーカー規制法ができた今、ストーカーを取り締まることができるようになりましたが、別の問題として、女性側が恨みのある男性に復讐として、やってもいけないことを警察に取り締まらせるなんて問題も起きるのかも、とあってしまいました。」
- ・「全国でストーカー殺人が多発していて、ニュースを見るたびに怖いと思う。」

埼玉県桶川市の事件では、女子大生がストーカー被害にあい、警察に相談していたにもかかわらず、相手にしてもらえず、ついには殺された。ストーカー問題は、近くにいる人がいつストーカーになるかもわからず、自分では気をつけようがないので、本当に怖いと思う。」

- ・「ストーカーは元恋人や元配偶者、知人、友人という例が多い。日常生活に危険が潜んでいて、本当に怖い。ストーカー行為は心理的被害が大きいと思う。感じ方は人それぞれ違うので、それに警察がどう対処してくれるかが問題だと思う。人間不信になったりしそうで、本当にイヤな問題だと思う。」
- ・「以前ニュースで、女子大生と女子校生が交際していた男性に殺された事件がとりあげられ、警察の対応なども問題になった。ストーカー法などが作られることにより、ストーカー問題が解決されればよいのだが。また、ストーカー法が悪用されないようにもしてもらいたい。」

#### 第5位（3名） 「男と女の境界線……その性を取りもどす時」

- ・「性同一性障害に悩む男の人が、小さい時から努力をして高い声を維持し、今では普通に高い声で話しているのを見て、本当に驚いた。この声はどこからきているのかと、本当にわからなかった。すごい努力だと思った。」
- ・「このビデオで印象に残っているのは、女性の心を持った男性だ。本当にしぐさや言葉づかいが、私よりも女性らしいと思った。以前はニューハーフの人たちに対して嫌悪感があったが、このビデオを見てから、少しはそういう人たちの気持ちを理解できるようになった。」
- ・「衝撃的なビデオだった。男が女として生活する、女が男として生活するなど、びっくりだったが、その人の気持ちがわかるような気もした。声が違いすぎて、誰がしゃべっているのかわからなかったことをよく覚えている。」

#### 第5位（3名） 「“くたばれ” に大反響・専業主婦論争第2弾」

- ・「石原里紗さんは物事をズバズバ言うので、ビデオも本もすごくおもしろかった。本はいろいろな人の体験談が載っていて、ウンウンとうなづけることが多かった。私は昔は専業主婦に憧れた時期もあったけれど、やっぱり夫婦対等でいられるのは共働きの方だと思うし、私は専業主婦にはなりたくない。本にあるように、専業主婦を選ぶのはかまわないけれど、他人の家庭に首を突っ込むのはルール違反だと思う。1人1人に個性があるように、1家族ごとに中身は違うのだから、そこらへんを理解してくれたらいいと思う。」
- ・「様々な人の女性の位置の考え方を知ることができた。専業主婦だからといって、社会に不必要な存在だとも言えないと思うし、シングル・マザー、独身という形が悪いとも言えない。ただ、自分のこれからの人生、後になって誇れるようにどう生きていくかを考えさせられるビデオだった。」
- ・「私は主婦でもあり、仕事もしているので、それぞれの言い分がわかるような気がします。本を読んだ時よりも、ビデオを見たほうがわかりやすいと思いました。皆それぞれ弱みがあり、それを指摘するのではなく、お互いに認めた上で意見を言えば、また違った論争になると思いました。」

#### 第5位 (3名) 「世紀を越えて・ウーマン・豊かな国の静かな革命」

- ・「アメリカの大手企業で働く女性の生き方がとてもかっこよく、憧れをもった。女だからできないという理由がおかしいと思い、できると思ったことに挑戦していくという生き方は、当時は変わっていたのかもしれないが、能力主義になってきている今では、さほど変ではないと思う。彼女は目標にしたいと思う存在だった。」
- ・「女性があらゆる分野に進出するようになったが、それ以前は認められなくて、女性の力で社会を変えていった。女性議員ももっと人数が増えて、女性にとって働きやすい職場、住みやすい社会を築いていくよう、私も女性として努力しようと思った。」
- ・「結婚はしないが子供だけは欲しい、と人工授精をする人がいることを初めて

知った。シングル・マザーと言えば、夫が死んだ、離婚した……というパターンだけだと思っていたからビックリした。やっぱり大変だろうなあ。」

第5位（3名） 「こころの風景 子育て

② これが私の生きる道・母親たちの選択

- ・「様々な女性の子育てに対する考え方や、その人の子育ての仕方などを知ることができた。うまく仕事と両立できている人もいれば、その逆の人もいる。私も将来子育てをすることになったら、周囲の協力を得て、両立させていけたらと思う。」
- ・「積極的に仲間づくりをして、その仲間が集まって意見交換や遊びをする。このような仲間づくりはとても大事だと思う。親のストレス解消にもなり、子供の社会性も育つ。積極的子育て、それが自分流にあっていたら、すばらしいと思った。」
- ・「みんながそれなりにたくさんの問題を抱えて生きていることがわかった。最後の島の生活のビデオが一番印象深いです。スゴイ楽しそうで、いいなーと思った。近所つきあいや自然とのふれあいも大切だし、心が和む。」

(注……「こころの風景 子育て ② これが私の生きる道・母親たちの選択」が終わってから、「少子社会ニッポン② 少子の時代をどう生きる」の冒頭部分……合計特殊出生率が4.39という沖縄の伊是名島の子育て、つまり島ぐるみ、地域ぐるみでの「子どもは島の宝」という子育ての様子……を見せたが、感想の後半はこのことに対して言及している。)

第9位（2名） 「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より

③ 10代の性体験43%

- ・「私はまずこの36%の数字に驚いた。数字が高いからではなく、『えっ、それ



だけ!?’と思ったからだ。東京、大阪近辺はもっと数字が高いはずだ。まわりの影響や焦燥から『早くSEXしたい』と思うのだろうが、まわりに流されず、自分の意思にしたがって、気持ちを大事にするべきだと思った。」

- ・「テレホンクラブで知り合った人とお金欲しさのために関係をもった、というのが売春行為であると言われるが、それは同意のもとでのことと考える方法もあると思う。しかし、付き合っている彼に迫られて、断り切れずにそのままなづいてしまう、断れば彼氏に嫌われてしまうのでは……、と考える人が意外に多かったことには驚いた。」

第 9 位 (2 名) 「子を虐待する母親たち

……代理によるミュンヒハウゼン症候群」

- ・「ミュンヒハウゼン症候群という病気は、このビデオを見て初めて知りました。この病気が怖いところは、親は自分が子供を虐待していると全く思っていない、また親も傍から見たらそれなりにしっかりしている人が多いというところでした。子供を病気に仕立て上げ、世間に注目されるのを喜ぶという親の心理は、少し興味深く思いました。しかし、周りから見たら普通の家庭の中で、子供が誰にも打ち明けられずに悩む、こんなことは子供の心に大きな傷を残してしまいます。医者や母親以外の家族が、気づいてあげなければなりません。ドクター・ショッピングという言葉が印象的でした。」
- ・「ミュンヒハウゼン症候群という病気を初めて知った。子を愛するあまり虐待という形になってしまっていることに気づかない母親、母親に愛されたいがためになされるがままになってしまっている子供が、世界の至る所にいるのだろうかあとと思った。」

第 9 位 (2 名) 「“世紀を越えて”を読む・男女の役割を越えて・

女性の社会進出が問いかけるもの」

- ・「ビデオの中で男性のコメンテーターが、『共働きによって気持ちが大大楽になる』と言っていたのが印象に残った。灯のついた部屋で奥さんに待っていてほしいとか、共働きは世間体が悪いとか、という考えは古いと思う。共働きをして助け合うのが、理想の夫婦関係に思える。」
- ・「私はこのビデオの中で言っていた、『家族の新しいかたち』にとっても共感しました。『家庭はこのようにあるべきである！』という枠にとらわれすぎ、周りから陰口を言われるのをおそれて、自分たちのやるべきことを見失ってはいけないと思いました。共働きでもいいし、男が家事を女が仕事をしてもいい。2人が対等で、お互い頼り合うべき存在というのが、本当の夫婦であると思うのです。」

第11位（1名） 「課外授業ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」

- ・「印象に残っているのが、外科医の話。『外科医は実はお母さんだったのです』という話は、女医さんはたくさんいても、頭の中に男の人が浮かんでくるということを発見し、意外でした。」

第11位（1名） 「こころの風景 子育て

① わかって下さい・母親たちの孤独」

- ・「ある主婦が、『自信がないから主人にしてもらおうかしら』と言っていたのには、ショックを感じた。自分の子供なのに人（父親だけ）まかせにしようとした。『自信がない』というのは、まわりの情報に流されすぎだと思った。それぞれの子育てのペースがあるのだから、どの情報を選び活用するかが大事だと思う。また、多くの主婦が『自由な時間が欲しい』と言ったのは、いかにダンナが子育てを手伝っていないか、ということをお話している。大変だけど、我が子の成長をみるのは楽しいと思うので、男性も積極的に子育てをするべきだ。それは少年犯罪の減少にもつながると思う。」

## 第11位 (1名) 「夫が突然殴り出す」

## 「妻を殴る夫」

- ・「夫は少しでも気にいらなことがあると、妻を殴る。ほとんどの女の人は、男の人の力には勝てないから抵抗できない。夫の暴力に何十年も耐えている人もいた。逃げても連れ戻されたりする。また、経済的に自立できないから別れられないという人もいて、ここでも専業主婦ということが関係していて、考えものだ。」

## おわりに

「はじめに」でも述べたように、第5期生の「女性学ゼミ」では、1年生後期の「演習1」は従来どおり『女性学への招待』と『男性学入門』の2冊を読むことによって、「女性学」と「男性学」の基本を学んだ上で、2年生前期の「演習2」は視覚的でイメージがつかみやすい「ビデオで女性学」を試みた。ビデオ学習では、子育てや児童虐待の問題、夫婦間暴力やストーカーの問題、専業主婦の問題、男女の性の問題など、「女性学」と「男性学」に関わるさまざまな問題を取りあげることができた。

つまり、「女性学」と「男性学」の基本文献を学びつつ、さまざまな問題をビデオで学んで討論で深めるということ、ある程度は実現できたように思う。

そして、アンケート結果を見ていただければおわかりいただけるかと思うが、「女性学ゼミ」の目的である「女らしさ」「男らしさ」についての刷り込まれた固定観念を突き崩すということには、まあ成功したようである。

今後の課題は、この「女性学ゼミ」で学んだことを卒業論文として結実させることである。そしてその過程で、彼女たちが「女性学」と「男性学」をさらに深めることにより、社会人となってからの人生を主体的に選択することをめざして、しなやかにかつしたたかに生きぬく指針と方法を会得されんことを、強く希望するものである。